

談

話

室

妻への多額の債務をどう返すか

私のまことに個人的な、小さな小さな話を書かせていただくことをお許しいただきたい。

5年前、大学を定年退官直後に、脳梗塞で倒れ入院した。幸い、症状は軽く、3週間余りで退院することができ、特に後遺症はない、との医師のご宣託をいただいたのだが、元気ばかりが取り得だった私にとっては、大きな衝撃であった。

日頃あまり上手を言わない妻が、入院初日に「早く元気になって。。。私が頑張つて健康回復のお手伝いをするから」と言ってくれた一言は、胸にジンと来た。

考えてみれば、大学を退官するまで、わが家は「寝に帰る場所」以上の意識を持ったことはなかった。家族をないがしろにし、仕事最優先の生活を当り前のこととしてきた。昭和一桁生まれの通弊、といえば同世代の皆様にお叱りを受けるかも知れないが、少なくとも私は、そのような手前勝手な生き様に、疑問を持ったり反省する気になったことは、一度もなかったと言ってよい。

ところが、短い入院期間であったが、病気のショックや妻の一言がきっかけとなって、単調な点滴治療の無為の毎日の内で、己の来し方を静かに振り返るまたとない機会が与えられた。また、30数年に及ぶ結婚生活の中での夫婦らしい会話のトータル時間よりも恐らく長い2人の語らいの時間を持つこともできた。私は殊勝にも「これからは努力するから、何でも遠慮せずに言ってくれ」と、妻は「そうしますよ」というように、毎日、夫婦の会話が弾んだ。

退院直後だったが、以前から頼まれていた講演のため東北地方に行かざるを得なかった。妻が「心配だから、看護婦代りに付いて行く」と言ってくれ、安心して講演旅行ができた。

本当に久し振りの夫婦旅行であった。私には新鮮で楽しい旅行だった。家に籠もり勝ちで3人の子供の世話と家事に追われて来た妻には、私以上に楽しく感慨深い旅だったようで、味を占めたのか、その後は、しばしば私の講演旅行への同伴をねだった。私の方も、先方にご迷惑を掛けないように工夫し、講演日の前後を活用した旅行プラ

ンを立てて、妻を誘った。この5年間で北海道から沖縄に至る各地へ、20回前後は夫婦旅行を実現できた勘定になる。

妻が喜ぶのは温泉地での宿泊だ。最近では、宿泊旅館の選定を含めて、私の旅行プランづくりも腕が上がり、妻も大いに満足してくれるようになった。「お父さん、JTBにでも勤められますね」などと煽ってくれる。

夫婦で遠慮なく話し合える時間と気持のゆとりができたことで、これまで思いもしなかった妻の心の奥が見えるようになった。妻はこれまで大して愚痴も零さず、素直に付いて来てくれたように私は錯覚していたのだが、やっぱり、私への妻なりの恨みつらみは大きなものがあったようだ。「お前には、大きな借金を作って来たんだよな」と言うと、「そうですよ。しかも利息もいただけないのですから」と笑って言う。

妻にとって私は、結婚当初から、不良債務者であったらしい。しかも、年を経るにつれて債務は累積して行った。ただし、ここ数年の何回もの楽しい夫婦旅行で、利息は大分支払ってくれるようになったと思ってくれているらしい。

私としては、残りの余生で何とか妻との取引勘定をマイゼロ近くに持って行きたいのだが、そのためには、元本部分の返済が不可欠である。実は、定年退官祝賀会の席上で、恩師の先生から「奥さんの長年の労苦を労う意味で、海外旅行に連れて行ってあげなさい」と私が諭されたことを妻はよく覚えており、妻は、海外旅行に連れて行ってくれることで元本が返って来る思いになっていることが分かって来た。

ところが、発作を起こして入院するという事態になったこともあり、娘達も、「海外旅行はもう無理よ」と言ったりするものだから、妻は、私への大きな債権がいよいよ回収不能の不良債権化しつつあることを感じ取っているらしいのである。

私は、妻とのヨーロッパ旅行を全く諦めているわけではないし、せめて私が最も感動したイタリアには連れて行きたいと考えている。そのことで少しでも元本償還をしたいのだが、それにしても、返済し盡せるはずがないほどの、何と大きな妻への「心情的負債」を作ってしまったものか、という慚愧の思いが募るこの頃である。

(京都大学名誉教授 (社)農業開発研修センター会長 藤谷築次・ふじたにちくじ)